

の部 ナソニック(EW本社)が 座奪還!



【先鋒】 相原 (パナソニック・EW本社) 〇— 榎本 (NTT東日本・東京)

▲全日本女子選手権大会でも活躍する上段の相原が試合開始から積極的に攻めていく。一本となったのは片手ゴテ(写真)。榎本がメンに出ようとするところを出ばな気味にとらえた。その後も片手、諸手と多彩な技を繰り出し続けた相原が一本勝ち。この1勝が結果的にパナソニックの優勝を決める金星となった

決勝

チーム	先	中	大	得点
パナソニック (EW本社)	相原 〇	近藤 ×	信田 ×	1
NTT東日本 (東京)	榎本	沖田	長谷川	0

2019年の第22回大会以降、世界は新型コロナウイルスの脅威にさらされ、それはいまもまだ終息には至らない。剣道界もまたあらゆるイベント、そして日常の稽古すらも制限される期間が続くも、少しずつ活動が再開されるようになってきた。

高校や大学、少年剣道が復活するなか、ついにリスタートを切った実業団大会。3年ぶりに開催された全日本実業団女子大会は、過去に優勝、2位、3位入賞がそれぞれ2回ずつあるパナソニック(EW本社)が制することとなった。

同社は実業団剣道界のなかでも群を抜いた選手層の厚さを誇り、大阪を拠点として活動する本社、門真、大阪の3チームのみならず、東京を拠点に活動する関東、東京、汐留の3チームも実力者揃い。当時のパナソニック電工(門真)が初入賞(2位)を果たした第13回大会(2009年)以降、前回大会まで9大会が開催されてきたなかで入賞を逃したのは1大会のみ。それ以外の8大会すべてでグループ内のどこかしのチーム、あるいは複数のチームがベスト4入賞を果たしている。

優勝したEW本社のメンバーもまた豪華な選手が顔を揃え、先鋒の相原、中堅の近藤、大将の信田、そして今回補員となった大亀の4人全員が日本の最高峰・全日本女子選手権大会への出場経験を持つ。近藤、信田、大亀の3人は激戦区の大坂代表として全日本選手権出場を果た

第23回 全日本実業団女子・高壮年剣道大会

令和4年3月5日(土) 東京武道館 主催◆全日本実業団剣道連盟 取材◆岡井博史 撮影◆窪田正仁

3人制の団体戦で争われる全日本実業団女子大会、40歳以上の参戦選手によって優勝を競う五段以下の部、六段以上の部の個人戦が、2019年以来3年ぶりの開催をむかえた。

いまだ新型コロナウイルスの感染拡大には終わりは見えない状況下だけあって欠場チーム・選手も少なくはなかったが、それでも、ついに実業団大会が再始動!



優秀選手・近藤沙希

(23歳・パナソニックEW本社)
「素直にうれしいです。先輩方がここまで連れてきてくれました。それを信じて自分のすべてを出し切りました。その結果が優勝という最高の結果に結びついたので素直に「うれしい」の一言です。まだ入社1年目で、この全日本実業団大会には初出場。大会自体が果たして開催されるのか分からない状況のなかで仕事と剣道の両立をはかるのはとても難しい作業でした」



優勝・パナソニック(EW本社)

相原清乃(24歳)、近藤沙希(23歳)、信田茉莉奈(28歳)、大亀杏(27歳)。
監督=大道美幸(40歳)
「コロナ禍では稽古は男女で分け、さらにグループ分けなどして人数を減らしてやっていました。選手選考は大変で、大阪の各種大会の結果や日々の練習を見て、私、キャプテン、副キャプテンで決めました。(大会中止もあって)この大会に過去出場した経験があるのが会社でも3人ほど。そういう意味でもチャレンジャーの気持ちで大会に臨みました」(大道監督)

※記念写真撮影ののためにマスクを外しています



決勝	ランテック (東京本社B)	1 (1) 代—1 (1)	東洋水産 (本社)
代表	吉武	コ—	杉本

洋水産の先鋒は今春入社した中央大学出身・時田。時田の勝利で東洋水産制するも、ランテックは中堅吉武が勝って追いつく。大将戦引き分けのあ代表戦は中堅同士の再戦。長期戦を制したのは吉武だった (写真は攻防)



回戦	パナソニック (EW本社)	2 (4)—0 (0)	伊田テクノス (本社)
中堅	近藤	㊦コ—	工藤

J回大会 (2019年) で優勝を飾った伊田テクノス。連覇を狙いたいところが中堅戦で二本負け (写真は二本目のコテ) を喫すると、その後の大将落としてしまい4回戦敗退となった



ンテック (東京本社B)

2歳)、吉武礼絵 (22歳)、門川絢音 (22歳)。一男 (49歳)



準々決勝	パナソニック (EW本社)	1 (2)—1 (1)	パナソニック (EW関東)
【中堅】	近藤	〇〇—	金本

▲先鋒戦を引き分けたあとの中堅戦、近藤が足を使って攻めるなか、対する金本が足を負傷し (写真) そのまま棄権。関東チームは大将の久徳がメンを奪ってあと一本にまで迫るが、本社チームの信田はその後決定打を許さなかった



準々決勝	NTT東日本 (東京)	1 (1)—0 (0)	日本通運 (本社G)
【先鋒】	榎本	㊦—	青木

▲榎本が問合を切ったところから力強く攻め込んでメンを奪う (写真)。その後の中堅、大将は両チーム有効打突を奪うことができず、この先鋒戦の勝利が結果的に勝利の明暗を分けた



2位・NTT東日本 (東京)

榎本響香 (25歳)、沖田瑞希 (25歳)、長谷川理恵 (24歳)、尾名高由佳子 (26歳)。監督=中島裕敏 (53歳)



準々決勝	パナソニック (EW汐留)	0 (1) 代—0 (1)	NTT東日本 (千葉)
【代表】	柿元	メ—	坂口

▲全日本女子学生優勝大会で優勝した中央大からの新戦力・小川、坂口が参戦したNTT東日本。先鋒戦を引き分けたあとの中堅戦では坂口がコテを先取るも対する徳田もメンを奪って引き分け。大将戦も引き分けに終えたあとの代表戦は長期戦となるが最後はパナソニック柿元のメンが決まった (写真は攻防)



【大将】	長谷川	(NTT東日本・東京)	㊦—	門川	(ランテック・東京本社B)
------	-----	-------------	----	----	---------------

▲NTTが先鋒戦で二本勝ちするが、ランテックもすぐさま反撃。今春入社の新人・吉武が上段から片手メン、そして諸手のメンも奪ってスコアをタイに戻す。同点同本数でむかえた大将戦は激しいぶつかり合いに。ここでは長谷川が門川のメンを引き出してコテにとらえて一本奪うと (写真)、その後は門川に反撃の時間は残されていなかった

準決勝

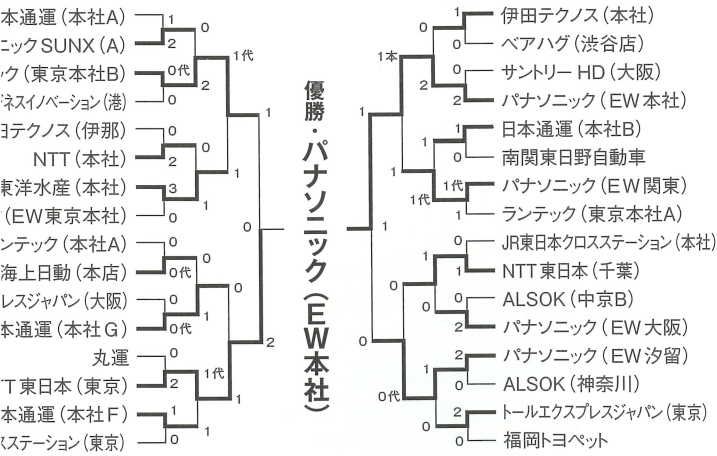
チーム	先	中	大	得点
パナソニック (EW本社)	相原	近藤	信田	1
パナソニック (EW汐留)	合瀬	徳田	柿元	0

【中堅】	近藤	(パナソニック・EW本社)	㊦—	徳田	(パナソニック・EW汐留)
------	----	---------------	----	----	---------------

◀先鋒戦、パナソニックの上段・相原の片手メンを合瀬が返しドウに打ち取って先制。その後相原も上段からの諸手メンで一本を返して引き分けとなる。中堅戦、積極的に攻め込む近藤がコテで惜しいところをとらえた直後、続けざまにコテ (写真)。この一本で1勝を得たパナソニック、大将戦は引き分けに終わり、決勝進出を決めた

準決勝

チーム	先	中	大	得点
NTT東日本 (東京)	榎本	沖田	長谷川	2
ランテック (東京本社B)	松村	吉武	門川	1



しては本来主力としての起用を想定していたなか昨年試合中にアキレス腱を断裂。大会時はチームのサポートに徹していたが、「いい刺激をもらった。次回は必ず私も活躍します」と仲間のかげに闘志が再燃した様子であった。

大会2位はこちらも名門NTT東日本 (東京) が入賞。3位には関東で活動するパナソニックメンバーで編成されたEW汐留チーム、そしてランテック (東京本社B) が入賞を果たした。22歳の若手選手で固めたランテックは途中代表戦にもつれる苦しい戦いがありながらも上段吉武の奮闘によって勝利。これが同社にとって初の入賞となった。

決勝戦、信田の思いに応えるように値千金のコテを決めた相原は入社3年目。コロナによって大会出場のコテを奪われ、今回は初の全日本実業団参戦となった。相原は大会を振り返り、「決勝戦までは後ろの2人に連れてきてもらった感覚があったので、最後はチームに貢献したい。本来得意技にしている片手ゴテが1回戦目からなかなか決めることができませんでしたが、最後の最後で無意識に出すことができた。練習してきてよかったです」とコメントを残した。

今回控えに回った大亀だが、チームと

ですでに5回の出場歴を誇り、2021年9月の第60回大会ではベスト16進出を遂げている実力者である。

その相原が上段からの気迫あふれる技で切り込み隊長としての役割をまっとう。中堅の近藤が安定感のある戦いぶりで試合をコントロールし、全試合リードを保った状態で大将へとつないだ。

大将を務めた信田は現在剣道部キャプテン。選手としては今後も大会に継続参戦するものの、キャプテンの役職は今年大会をもって降りるという。キャプテンとして臨むこの最後の大会はなんとか勝って終わりたいと思っていましたが、後輩が本当によくがんばってくれました」と万感の表情で語った。

神崎（アールエフテクニカ・本社）ヤマ場を乗り越え頂点に



決勝 神崎（アールエフテクニカ・本社） ⊗ メー 加藤（東和アークス）

▲上段の果糖に対してグイグイと前進していく神崎。加藤がその圧力に引き出されるようにして諸手でコテを振り下ろしたところに神崎のメンが決まる。二本目となっても神崎の攻めは変わらず、再び加藤のコテを誘い出してその打ち終わりをメンにとらえた（写真）

優勝・神崎力

（44歳・アールエフテクニカ本社）

「この部門への挑戦は3回目が入賞自体初めてですね。毎回、NTTの山本さんの壁に阻まれ続けてきました。今回はたまたま判定で勝つことができたので運が良かったですね。やはりコロナの影響であまり稽古も積み重なっていませんでしたが、それでかえって無心で臨めたような気がします」



意外なことにこの部門では今回が初入賞となった神崎だが、いままで高い壁として目の前に立ちはだかっていたのは山本（東日本電信電話・本社）だったという。実績豊富な山本は過去にこの部門では2回の優勝を誇り、2021年3月の第68回全日本選手権には45歳の年齢で自身2回目の出場を果たしている屈指の強豪選手。今回神崎は山本との準々決勝を苦しみながらも判定で勝利。大きなヤマ場を乗り越えたことで勢いづき、上段との連戦となった準決勝、決勝はそれぞれ相手から二本奪っての快勝となった。

関東実業団大会2位の戦績を誇るアールエフテクニカは強豪チームのひとつだが、なかでも神崎は東京都代表として全日本都道府県対抗優勝大会で優勝を飾るなど実業団の枠を飛び越えて活躍する選手の一人。最高峰・全日本選手権大会への出場こそまだ叶えてはいないものの、その東京都予選大会では警察の選手たちを相手に五分以上の戦いを繰り広げて名を馳せている。



準決勝 加藤（東和アークス） メー 中野（上池自動車学校）

▲加藤が上段からの片手メンで攻めると、中野はその打ち終わりに狙いを定めて技を繰り出していく。加藤の諸手コテに旗が一本上がる場面もあったが決めきることができず、延長戦、勝負の一打となったのは中野の打突後のスキを狙った加藤の諸手メンだった（写真）



準決勝 神崎（アールエフテクニカ・本社） ⊗ メー メ 立花（東日本電信電話・東京支店）

▲上段に構える立花に対して神崎はすばやい攻め込みで揺さぶりをかけていく。立花は神崎の入りばなを狙って諸手のコテを打ち下ろすも神崎はこの技を打ち切らせない。一本先制したのは神崎。近い間合から放ったコテを有効打突とした（写真）。一方の立花も諸手で放ったコテメンで一本返すが、最後は神崎のひきメンが決まった

準々決勝 神崎（アールエフテクニカ・本社） 判— 山本（東日本電信電話・本社）

◀実力者同士の戦いに注目が集まった。山本が足を踏み鳴らしつつ伸びのあるメンを放てばこれは惜しいところをとらえる。一方神崎は細かく力強い足さばきで山本を攻め立てる。延長戦に突入してもなかなか有効打突は発生せず、5分間の延長戦も終了。ルールによって判定での決着となり、ここは神崎に軍配が上がった（写真は攻防）



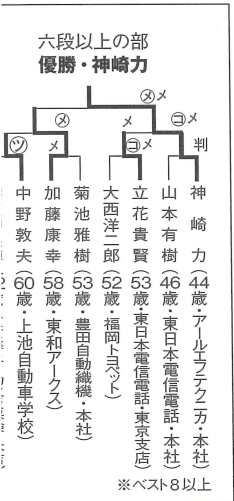
準決勝 立花（東日本電信電話・東京支店） ⊗ メー 大西（福岡トヨベツ）

から大西が気迫充分にメン、そしてコテに跳び込むが、立花は上段から強烈に振り下ろして一本先制（写真）。この一本で勢いづいた立花はその後諸手込んで短時間で勝利。立花は第21回大会（平成30年）以来の準決勝進出（写真は攻防）



準決勝 加藤（東和アークス） メー 菊池（豊田自動織機・本社）

段の加藤と左片手一本で上段に構える菊池との対戦。両者なかなか打突部ことができず、試合は延長戦へと突入。細かい足さばきで拍子を取る加藤が片手メンに出ると菊池もここにコテを合わせる。加藤のメンが一瞬早く菊（写真は攻防）



3位・中野敦夫
（60歳・上池自動車学校）



3位・立花貴賢
（53歳・東日本電信電話東京支店）



2位・加藤康幸
（58歳・東和アークス）

※記念写真撮影のためにマスクを外しています

五段以下の部

冴える上段、永洞（S・R・Sクラフト）が初制覇



決勝 永洞（S・R・Sクラフト） **ココー**× **大竹**（みずほ銀行・東京営業部）

▲軽快な足さばきから積極的に技を出していく大竹。先をかけて攻め込んでメンを繰り出すとこの技が鮮やかに決まる。その後も大竹はアグレッシブに攻めるが、永洞も片手技、諸手技を休みなく繰り出し続け、見事な諸手ゴテで一本奪取。その後ほとんど同じような諸手ゴテを決めて永洞が逆転勝利（写真は二本目のゴテ）



優勝・永洞勝也

（48歳・S・R・Sクラフト）

「長くカミナガ販売に勤務していましたが、中学校時代の先輩から声をかけられた縁で去年4月からいまの会社に。できて間もない剣道部で稽古も週に1回できるかどうかといったところ。今日は試合を重ねていくに連れて試合間隔も短くなってキツかったですね。高壮年初出場ということもあって攻めの姿勢を貫けたのがよかったです」

六段以上の部にこそ及ばないもの、こちらもエントリー選手数は165人にものぼった五段以下の部。厳しい戦いを制したのは、かつて実業団の強豪チーム・カミナガ販売の主力選手として活躍した永洞（S・R・Sクラフト）だった。

昨年より新たな職場で働いているという永洞。剣道部の活動は公共施設を利用しつつ週に1回程度というが、パワフルな上段は健在。この部門への参戦は初めてのことだが、豪快な片手技、巧みな諸手技を使い分け大会の頂点へと駆け上がった。

決勝戦の相手は第16回大会（2013年）で3位に入賞した経験のある大竹（みずほ銀行・東京営業部）。名門の中央大学出身だが一般入部生とのことで学生当時は選手としての活躍はないという。体格的に小柄ということもあって、本人も自分の武器として語るのには「機動力」だ。56歳という年齢、そして昨年右足首を骨折したというアクシデントの影響を感じさせないアグレッシブな試合ぶりです。決勝戦に進んだ大竹。上段の永洞に対しても臆することなくメンに飛び込んで先制したが、「来るところに合わせよう」と思っていたところに合わせられた。そこからは自分のパターンに持ち込むために間合を見ながらいなしながら」と振り返る永洞に諸手のゴテ二本を返された。

※記念写真撮影ののためにマスクを外しています

準決勝 大竹（みずほ銀行・東京営業部） **ドー** **小幡**（総合警備保障・東京）

試合開始から攻めの姿勢を見せた大竹が試合の主導権を握る。小幡は手数では圧倒されるも大竹の動きを注視しつつ、チャンスをつかっている様子。豊富な持ち技で小幡を攻め続けた大竹。延長戦に突入しても攻めの姿勢は変わらず、最後はドウに切り込んで勝負を決めた（写真）



準決勝 永洞（S・R・Sクラフト） **メー** **前嶋**（セコム・関東）

▲かつて団体戦の実業団大会でも冴えに冴えわたっていた永洞の片手ゴテ。この一戦でもその伝家の宝刀が炸裂。前嶋の手元を見事にとらえた（写真）。得意技を決めてペースを握った永洞が二本勝ちで快勝、決勝進出を決めた



準々決勝 永洞（S・R・Sクラフト） **ココー** **西村**（三井不動産）

相上段となった準々決勝。積極的にコテを狙い続けた永洞が出ばに乘るかたちで片手メンを打ち込んで先制（写真）。これで相手の動きを読んだのか、永洞は攻めの姿勢を持続させてその後コテも奪う。優勝に向けて勢いをつけるような勝ちっぷりで西村を下した



準々決勝 大竹（みずほ銀行・東京営業部） **ドー** **斉木**（麒麟ホールディングス）

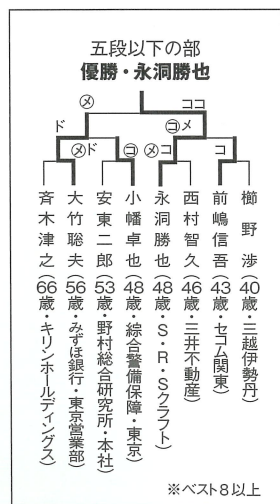
▲過去2回の2位入賞経験を誇る斉木。この部門の実力者同士の準々決勝は機動力で勝った大竹の勝利。すばやい入りからメンを先制すると（写真）、その後は斉木に反撃のチャンスを与えることなくドウを追加した



2位・大竹聡夫
（56歳・みずほ銀行東京営業部）

3位・前嶋信吾（43歳・セコム関東）
3位・小幡卓也（48歳・総合警備保障東京）

※3位の2選手は閉会式不在のため写真撮影できませんでした



剣道を愛する方へのご贈答用に



秋田県大曲発

モナカ

「剣道の街」

全4種類。単品販売もあります。



お求めは弊社ECサイトで

